

私たちも一翼を担いました!

文部省委嘱事業「平成7年度女性の社会参加支援特別推進事業」

ネットワーク すうday

長崎の女性たち
集まれ!

長崎の女性たち今を生きる

～チャンス・チャレンジ・そしてチェンジ～

- と き／平成7年11月11日(土) 午前10時30分～午後4時
- 主催／ながさき女性団体ネットワーク
長崎市女性センター アマランス

長崎市を中心としたおよそ150ほどの女性団体のうち20あまりの団体が中心となり、共同して女性問題を考える催しを企画・運営することになりました。日頃は個々バラバラに活動している女性たちが一堂に会し、力を合わせて1つことに取り組むのは大変骨の折れることではありましたが、それ以上に、多くの魅力的な女性たちと出会えたと楽しかったです。

「ばってんうーまんの会」の担当はこれです。

■ビデオ フォーラム

場所／長崎市民会館文化ホール
時間／午後1時～午後4時

「八十七歳の青春」

市川房枝、生涯を語る。つづいてくる人々へ自ら語り残した「私の歩いてきた道」

「私は男女平等を憲法に書いた」

憲法草案作成に携わった22歳のGHQ民政局員、ベアテ・シロタさん。男女平等の憲法が生れた秘密を本人の証言でつづります。

会員の1人がパネラーとして報告しました。

■ワークショップ

②「北京女性会議NGOフォーラムレポート」 於 研修室

8月末に開催されたNGOフォーラムに参加した長崎の女性たちの熱い想いを語ってもらいます。

暴行か？ レイプか？ 強姦か？

今回の沖縄の米兵による少女レイプ事件に対して私たちの会では敢えて「レイプ」ということばを使用しました。そのことに対して別の女性団体から「被害者である少女の心情を考えるといかがなものか。少女がかわいそうだ」という意見がありました。それに対して私たちは再度話し合った結果、やはりレイプという表現が適切であると判断しました。その理由として

1. マスコミ等に使われている「暴行」とか「いたずら」ということばでは、その犯罪の本質が明らかにされない。性犯罪だけでなく単なる暴力行為でも「暴行」という言い方が用いられるので、犯罪の内容があいまいになってしまう。ということはその犯罪の加害性——いかにひどい非人間的な残虐行為であるかということがいまいになりかねない。
2. 刑法第177条には「暴行又は脅迫ヲ以テ婦女ヲ姦淫シタル者ハ強姦ノ罪ト為シ……」とあり、容疑者の米兵3人のうち2人は容疑を認めているという報道がなされていることから「強姦」ということばを使うことも考えたが、刑法の「姦淫」が意味する性器の挿入だけが性犯罪ではない。上からのしかかてきた男に対する恐怖もレイプだし、女性が望まない性行為は全てレイプである。よって刑法の「強姦」より、英語のレイプの方が女性に対する暴力的な性犯罪をより広範に表現できる。
3. 「暴行」「いたずら」というマスコミ等の表現は、被害者の人権を考慮しての思いやりといった感じが強いが、それはレイプ＝傷め、結婚できないなどという本来被害者であるはずの女性が逆にダメージを受けるという社会風潮を前提にしている。しかしたとえ「暴行」「いたずら」というオブラートで包んだとしても多くの人はそれを強姦と見なしているのだから、思いやりにはなっていない。また強姦罪は普通の犯罪と違って女の方が挑発したとか暗い夜道を歩いたのが悪いなどと被害者の女性に責任転嫁され、男性社会の中で生きにくい状況を生む。これはまさしく女性差別である。私たちはそのような社会通念自体がおかしいと声を上げたい。レイプされたことを隠さなければならぬ社会を変えたい。レイプされた女は決して悪くないのだ。私たちは少女と共に怒りたい。

その後、私たちは考えをもっと深めたいという思いから、東京・強姦・救済センターにことばの使用についてたずねてみました。センターでは「強姦(レイプ)とは性暴力です、性行為ではありません。強姦は性を武器にした女性への攻撃と侵害です。女性が望まない、強制された性的行為(性器挿入だけではない)は、すべて強姦です。」という定義がなされていました。そして

「強姦が人権の否定であり、性差別であることの認識を持てれば使う言葉に迷うことはないと考えます。」という一文が添えられていました。

勇気づけられました。ありがとうございました。



遅くなりましたが、まとめてみました。

落合 恵子 講演会

< D o I t >

7月末 長崎で聞いた内容を紹介します。白いスーツで素敵だった。

いつか差別されない社会、選択の幅が広がった社会になったら、が作家としての原点「クレヨン・ハウス」の原点、「ウーマンズ・アイ」と言う「プライベート・レター」を出している原点。女に生まれてよかった、あるがままに生きられる社会を作りたい。

戦後50年、私たちの社会はどう変わったか、変わらなかったか。

2年前に来た1通の手紙を紹介する。50才台の女性から、「母は19才で農家の長男と結婚した。手足に障害のある女の子が生まれて非難をあびた。産む性を持った女がせめられた。わたしは真夜中に大雨がザアザアふる音を聞いて育った。風呂場で水をかぶって泣き声を消していた母だった。よそに行こうという私に母は女は耐えることしかできないといった。私はこのままだったら母を愛せなくなると思った。ある日姑が私をひもでしばれと言った時、母は私はそうしたくありませんと言って、二人で家を出た。その後母は肉体労働をして私をそだて、手術代を工面して手足の障害を除いてくれた。

その母に、落合さんの著書「ゆれて今」をプレゼントしたら母はよろこんで漢字を一字ずつ教えてもらって読み、帯の「何かを始めるのに遅すぎる事はない」を毎日くりかえし、絵手紙で「ありがとさん、花が咲いたね、私も咲くよ」と79才で書いて来る

400人に400通りの花がある。咲きやすい環境を作る、自分に自分で水をやる必要がある。」

子供の手紙、「苦しいんです、助けて下さい。休みが終わる前の日になると死にたくなる。親は我慢しろ、もう少し、と言うのですが何時まで我慢するのですか」

子が自死した母、「世間体が悪いから学校へ行けと言う夫に疑問を持ちつつ気兼ねして、お母さんの為にも行ってよ」と言ってしまった。お母さん本当に今日行かなくてはいけないの 甘やかすんじゃないよ、俺だってこんな思いで働いているとの夫の声が耳に聞こえてきて、行きなさいと言ってしまった」 娘は汽車に飛び込んだ。

「世界中を敵に回しても 行かなくていい」と言わなかったのか」と言う母。

たった一人でもいいから「良いんだよ」と言ってやれる大人になって下さい。自分の中の学校信仰、学歴信仰はマインドコントロールの一つ、言はなければ声の小さい側がいつも いつも泣きを見る社会は続いていく。人権の大切さを知った子は大人になって人権を守る人になる

女に生まれた私、「女なのにー」と言うのは女を男の下に見ていること。

いずれ老いと皆、障害者になる。障害者につらい社会は誰にでもつらい社会。

高齢の人が歳をとっているが故に悲しい思いをする社会は20才の貴方にとっても良くない社会。女であることで何等かの不自由さを感じる社会は私にとっても良くない社会。

今年3月1日 住民票が変わった。嫡出の子も非嫡出の子も「子」と同じように記載される様になった。手紙を一つ読みます。「興奮しています、残念なのは母がこの記事を見られなかった事です。私は婚外子です。当時母はふしだらといじめにあい私を連れて引っ越し大衆食堂で働いていましたが、ある日私が母の職場に行つてうかつに「お母さん」と呼んでしまいました。翌日母はセクハラによって職場をやめました。高卒で不採用になった時、愛した男と結婚出来なかった時、私は母を責めました。「あなたの父は誇りにしている人よ」と病んだ母は入院の前日父の住所を教えてくださいましたが、父からは連絡はありませんでした。今、落合さんの談話が載っている記事を供えて、この人が言っていることが私の言いたかった事よ と母に話しかけています」

差別のある社会は平和な社会ではない。女の問題が後回しにされたのは女が黙っていたから、口を開くとモグラ叩きにあったから。

オーストラリアの女性達の歌 最初は父だった、最後は息子だった、
その間に夫もドラムの音に見送られ鉄砲担いで
戦場にいった、母は一度も疑問におもわなかった、
耐える事、従順である事、受け身である事を教えられていたから、その通りに生きていたから、

小さな娘が女になり、息子の母になった、
おかあさん 大好きです、でも私たちはあなたの人生をくりかえさない、待ちつづける人生はいや、
おかしいと思った事は、たった一人でも手を挙げられる強い人になりたい、なぜなら貴女の人生はあまりにも悲しすぎるから。

フランスの核実験、長崎の人はどうするのですか。命と人権から見ると、この感覚を自分のなかに育てて行けるかが、成熟する国に成る為に必要な事です。「そう言っても社会は変わらない」という人は アメリカの公民権運動のバス・ボイコットをしたローザ・パークスを思い出してください。「黒人は白人の下、男より女は下、というのに疲れていたから あの行動をしたのです」 生き生きと自分を生きようとするには、それを阻む物と闘うしか 生き生きと生きる道はないのです。

最後に この言葉を「倒れる前のずる休み、休みとろうよ、燃え尽きる前に」

女はこの視点を 大切に。